

ロックの『人間知性論』における観念の知覚

春日 亮佑

・はじめに

『人間知性論』(以下、『知性論』)でジョン・ロックは、我々の知性の範囲について検討することを目的とした。知性の対象こそが「観念 (Idea)」である。では、知性の対象たる観念はいかにして知覚されるのか。本稿ではロックが『知性論』で論じている「我々の心の内の観念の知覚」について検討する¹。『知性論』全体を読み解く上で、知性の対象たる観念がいかにして知覚されるのか、ということについて検討することは不可欠だからである。とはいえ、ロックの「観念の知覚」には「トマトを見る」といった外的な対象についての感覚知覚だけでなく、「怒りを感じている」といった情念の知覚なども含まれており、我々の「知覚」の用法より幅広く使われている。当然、それらを一度に論じることは出来ない。本稿では、感覚知覚の際に行われている観念の知覚に絞って論じることにする。この問題には実は、我々が通常行っている知覚はいかにして行われるのかという、単なるロックのテキスト解釈に留まらない哲学的問題も胚胎されているからである。

観念の知覚はいかにして行われるのか。この問いに答えるため、まずは知覚される対象である観念の内実を明らかにせねばならない。観念の知覚の行われ方を論ずる上で、観念の内実について考察することは不可欠であるし、その考察を通して観念の知覚の行われ方も描出されるからである。また「ロックの哲学のなかの、最も基本的な用語」(一ノ瀬 2000, 283)である観念について考察することは、『知性論』全体を読み解く上で欠かせない。そこで、まずはロック自身の観念の定義について見てみよう。

観念とは「およそ人間が考える際の知性の対象」、「心象 (Phantasm)、思念 (Notion)、形象 (Species)の意味する一切、すなわち人間が思考する際に心が携

わることの出来る一切」(E1.1.8)である。このように、観念の定義は厳密とは到底言えず、これまで様々な解釈が行われてきた。ホール (Hall 1990, 9) やヨルトン (Yolton 1956, 87-90) が指摘するように、同時代人のリーらにとってさえも、彼の観念の用法は奇妙なものに感じられた (Lee [1702] 2011, 261)。そして、ロックの観念の解釈を巡る論争は、現在も続いている。これらの解釈はおよそ二つの立場に分類出来る。その第一は、ロックの観念を「像」や「感覚与件」といった、いわば「可感的 (sensible)」な意味にのみ捉える立場である²。古くはジョージ・パークリヤデイヴィッド・ヒューム、トマス・リードらがこのように解釈し、ロックの抽象観念に対する批判を展開した。第二は、ロックの観念に可感的な意味のみならず、「意味」や「概念」としか言い表せないような「可想的 (intelligible)」な意味をも認める立場である³。1節では、パークリが『人知原理論』(以下、『原理』)で行っている抽象観念批判の議論を紹介し、彼がロックの観念を可感的なものとして捉えていることを確認する。その上で、ロックの観念には可感的な用法だけでなく、可想的な用法もあるということを明らかにし、第二の立場を擁護する。

しかしながら、ロックの観念に可感的・可想的の二つの意味があったとしても、それらは互いにどのように関わっているのだろうか。実際、彼の観念はその内実の豊かさゆえに、多義的で統一性がないとして、ライルやウルハウスなどによって批判されてきた。そこで、2節では可感的な観念と可想的な観念との連関を明らかにすべく、まずはロックが『知性論』第2巻で論じている「判断」や「識別」などの心の機能に注目することで、ある心の作用が働いていることを確認する。そして、その心の作用の持つ特徴を明示した上で、ロックの観念説が、実は我々の知覚のあり方の統一的構図を捉えたものであることを明らかにする。このようにして、感覚知覚における観念の知覚の行われ方が提示される。

3節では以上を踏まえ、理論負荷的な知覚や倒立眼鏡の事例といった、ロックのテキスト解釈に留まらない問題について考える。これにより、ロックの観念説による感覚知覚の説明が、従来の感覚与件論では捉えられない知覚をその射程に入れていたことが明らかにされる。最後に、錯覚や幻覚についての説明を試みて、本稿を終えたい。

1. 『知性論』における可想的な観念

本節ではまず、ロックの抽象観念に対する批判を行ったパークリの議論を見ていくことで、彼がロックの観念を可感的に捉えていたことを確認する。次いで、ロックの観念に可感的な用法があることを示す。その上で、『知性論』における記述から、彼の観念には可想的な用法もあるということを明らかにする。

1.1 パークリの批判

パークリはロックの抽象観念について、『原理』で以下のように述べている⁴。

私自身に関しては、確かに、私が知覚した特定の事物の観念を想像したり自身に表象したりする機能やそれらの観念を多様に複合したり分割したりする機能を持っていることを見出す。私は頭が二つある人間や馬の胴体に結合された人間の上半身を想像することが出来る。また私は手や目や鼻がそれぞれ他の肉体の部分から抽象され、分離されるのを想像することも出来る。しかし、そうであっても私が想像する手や目がどんなものであれ、それらはある特定の形や色を持っていなければならない。[...]私はいかなる思考の努力によっても、上述の[特定の形や色を持たない]抽象観念を想念することは出来ない。そしてまた、物体と別個に、速くも遅くもないような運動の抽象観念を形成することは、私にとって同様に不可能である。そしてこのようなことは他の全ての抽象一般観念が何であれ、言えるだろう。正直に言えば、ある対象に合一されているものの、その対象なしに存在出来るような部分や性質である、他と分離されたある特定の部分や性質について考察する際には、ある意味で抽象することが出来る。しかし私は、対象から分離されては存在出来ないような性質について、一つを他から抽象したり別々に想念したりすることが出来る、というのを否定する。或はまた、上述の仕方で個物から抽象することによって一般観念を形成出来る、ということも否定する。ところが、後者の二つが抽象の本来の語義なのである。(PHK.I.10)

我々は通常何らかの抽象観念を抱く時には同時に、何らかの個別的な性質なども抱かずにはられない。そのため、完全に個別的な要素を捨棄したような抽象観念はあり得ない、ということである。『視覚新論』でも以下のように批判している。

もしロックが別の箇所述べている次のことを自分で想起していたならばどうであったらうか。すなわち「いくつかの両立しない観念を寄せ集めた混合様相の観念は、心の内に現実に存在することさえ出来ない、つまり思われることさえ出来ないのである」(E3.10.33) という文章である⁵。つまり、もしこの考えが彼の心に浮かんでいたならば、三角形についての上述の観念をつくることは、なしえる限りの骨折りと熟練をもってしても及ばないということもありえないことではない。というのも、そのような観念は明白で著しい矛盾から成り立っているからである。(NTV125)

要するに、等辺と不等辺といった、両立不可能な観念を三角形の抽象観念に入れることは、ロック自身の言明に反すると批判しているのである。ロックの抽象観念について、『注解』でも「これら[抽象観念]はその本性において矛盾を含んでいる」(PC561) と述べている。

確かに、パークリの言うように、我々は個別的でない「手一般」のようなものを具体的に想像出来ない。また、「等辺でも不等辺」でもあるような三角形をイメージ出来ない。このことは、我々が「四角い円」といった観念を思い描けないことから明らかであろう。そのような観念を抱くことは「心理的に不可能」(Bennett 1971, 36) である。ここでこれ以上、パークリ自身の観念観について詳しくは言及しないが、少なくとも彼がロックの抽象観念を可感的な観念として捉えていたことが見て取れよう⁶。

果たしてロックの抽象観念は可感的な観念なのか。彼は次のように述べている。抽象観念とは、個別的な対象より得られる個別的な観念から、個別的な要素を分離してつくられる (E2.11.9; E3.3.6)。これによって、我々はチョークや牛乳などの様々な色から、白色という抽象観念を得る (E2.11.9)。抽象の機能は人

間に特有の心の機能であり (E2.11.10), 動物はこの機能を持たないため, 抽象観念を持たない (E2.11.11). 抽象観念により, 我々は一般的な知識を得ることが出来るのだが (E4.6.16), 数学の命題はこうした一般観念によって構成されている⁷. 「三角形の内角の和は二直角に等しい」と言う時には, その三角形は特定の三角形を指しているのではなく, 三角形の一般観念を指している. 三角形の一般観念とは, 「斜角でも直角でもあってはならず, 等辺でも二等辺でも不等辺でもあってはならず, それら全てであると同時にいずれでもない」(E4.7.9) ような三角形の観念である.

このような抽象観念が可感的であるか可想的であるかを明らかにするために, 次にロック自身の観念の用法について見ていく.

1.2 可感的な観念

まずはパークリがそう捉えたように, ロックの観念に可感的な用法があることを確認する. スウェイビーのように, 彼の観念を全て普遍者として可想的に捉え, 可感的な用法を認めない立場もあるからである (Swabey [1933] 1991, 283-8). 本当にロックはこのように述べているのだろうか. そうではない. そこで, ロックが明らかに可感的に観念を用いている箇所注目しよう. 彼は「十全な観念と不十全な観念」について, 以下のように述べている.

私が十全と呼ぶ観念は, 心がそこから観念を得ていると想定する原型 (Archetypes) を完全に表象するような観念である. [...] 不十全な観念とは, それらの観念が指示する原型の, 部分的, すなわち不完全な表象である. (E2.31.1)

ロックが観念を原型の表象であると述べていることから分かるように, 観念を可感的にも用いていることが看取されよう. 「赤」という単純観念の表象とはまさに「赤」の視覚的なイメージなのだから, ここでの観念は可感的な観念である.

こうした箇所は他にもある. たとえば, ロックは「白さ」を知覚するという事態について, 以下のように論じている.

我々の内に白さの観念を産み出すのが小球であるにせよないにせよ、或はそれら自身が旋回力を持っているにせよないにせよ、以下のことは確実である。すなわち、我々の内に白さの感覚を産み出す独特の運動を光の分子に与えるのに適しているような物体から、より多くの光の分子が反射されればされるほど、またおそらく、その独特の運動が速ければ速いほど、その物体はより白く見えるということである。(E4.2.12)

ここでロックは粒子仮説 (corpuscular theory) に依拠しながら白さの観念の、色の度合いについて論じている。そして、それらの観念がそれぞれ色の度合い(濃淡)において異なるということから、それらが個別的な像であることが看取されよう。このように、ロックの観念にはバークリらが解釈したように、可感的な用法があることが示された。実際、我々は事物を知覚する際に感覚与件を受け取るし、白い建物を知覚する時にその建物の像を抱くのだから、このことは我々の日常に鑑みれば、極めて自然だろう。

1.3 可想的な観念

以上のように、ロックの観念に可感的な用法があることが確認された。しかし、彼の観念にはそれだけでなく、可想的な用法もある。顕著な例として、『知性論』第4巻で論じられる「正義」や「不正義」の観念が挙げられよう (E4.3.18; E4.4.9)。「正義」ということで我々が抱く観念とは、決して個別的な出来事の集まりではない。確かに我々は個別的な出来事を幾度も経験して正義の観念を抱くかもしれないが、そうして抱かれた観念とは具体的な像ではない。

同様のことが、三角形の抽象観念にも言える⁸。我々が三角形の抽象観念を用いることになる、「三角形の内角の和は二直角に等しい」といった幾何学的な命題について考えてみよう。この時に我々が抱く像は確かにバークリの言うように、個別的な三角形の観念であろう。しかし我々は現に、その都度個別的な三角形を思い描かなくても、この命題を理解出来る。この命題を理解出来るということは、この命題を構成する三角形の抽象観念を抱いているということである。

ある。そしてこの際に抱かれる抽象観念とは、等辺や不等辺といった個別的な性質を含まない、「三本の直線で囲まれた図形」という三角形の定義——ロック自身の言明に従うなら三角形の実在的 (real) 及び唯名的 (nominal) 本質 (Essence)——である (E3.3.14; E3.3.18)。三角形の定義は可感的なものではなく、言葉によって表され理解される、三角形の意味や概念である。ならば、三角形の抽象観念として、ロックが可想的な観念を意味していたことが見て取れるであろう。このように、ロックの観念には可感的なものだけでなく、可想的なものもあるのである。

2. 知覚における可感的な観念と可想的な観念

前節までの議論で、ロックの観念に可感的な用法だけでなく、可想的な用法もあることが明らかになった。ならば、彼の観念は多義的で統一性のないものなのか。こうした点は、ライルやウルハウスらによって指摘されてきた。ライルはロックが観念をいくつもの完全に異なる意味で使っていると批判し、彼の観念をパンドラの箱になぞらえている (Ryle [1932] 1971, 134)。また、ウルハウスはそれが概念なのか像なのか不明瞭である、と評している (Woolhouse [1971] 1994, 34)⁹。しかし、こうした批判は彼の「心の機能」に関する議論を読解することで斥けられる。

2.1 心の機能と感覚知覚

ロックは『知性論』第2巻で、単純観念について説明した後、心の機能 (faculty of the Mind) について論じる。最初に論じられるのが「知覚 (Perception)」である。そこで彼は、感官を通して知覚される観念がしばしば覚知 (notice) されることのない「判断 (Judgment)」によって変容させられることを指摘する。それは、習慣的習性 (habitual custom) によって可能になる。これにより、球が目の前に置かれた時にそれを平らな円としてではなく、球として知覚する。そのため、モリニュー問題への回答に見られるように、こうした判断を経験していない生まれつきの盲人は、開眼した時に視覚によって立方体と球体とを区別出来ない

(E2.9.8). この判断が覚知されないのは、あまりに素早く行われるからである (E2.9.10).

議論を再構成してみよう。我々が球状のものを見る時、そこから視覚的に得られる可感的観念だけを用いるなら、それは円形の物体として知覚される。すなわち、両者の差異を形に関する可感的観念によっては区別出来ない。しかし、我々はそれらの一方が球体であり、もう一方が円であることを現に知覚出来る。それは、光の反射から、その円が本来は球であることを判断するからである。こうした判断は経験的に身につけられる。そして判断することが内省から得られる観念であることから (E2.7.2), 判断もまた心の機能によってもたらされる、心の作用 (Operation of the Mind) の一つである¹⁰。ロックの議論はこのように捉えられよう。

では、判断するということで、具体的には何を行っているのか。ロックは判断についてこれ以上のことを述べていない。しかし、「机の上に置かれたトマト」を「知覚」する際に、次のように「知覚」としていると解釈出来る。我々はまず、(1) 机の上のトマトの感覚与件を受容する。しかし、これだけでは「机の上のトマト」という観念は得られない。それをひとまとまりの実体として「知覚」出来ないからである。そこで、(2) 受容された可感的な観念を把持する。「把持 (Retention)」とは、記憶の他に「心に入ってくる観念をしばらく現実に眺める」(E2.10.1) ことである。ここで「しばらく (some time)」と述べているのは、我々が知覚するのに一定の時間を要することを考えれば、十分に納得出来るよう。つまり、ある程度その可感的な観念を眺めなければならないと述べているのである。とはいえ、これではまだ、「トマト」を一つの実体として「知覚」出来ない。トマトと机が別個であること、すなわち机とトマトが一体となっているような実体でないことを区別出来ないからである。そこで次に、(3) 可感的な観念、すなわち視覚像をその範型 (Archetype) と比較する。この場合、範型となる実体は感覚的に知覚出来ない (E2.31.6)。それは想定された概念なのであり、可想的な観念である。そして、「比較 (Comparing)」とは、「範囲や程度、時間、空間、或は何らかの他の状況」(E2.11.4) に関して行われるのだが、一般観念のような可想的な観念についても行われる (E2.11.5)。そのため、ここでは可想的な観念である、実体の範型に対して行われる。ただし、これだけではまだ「赤いトマト」をひとまとま

りの実体として「知覚」出来ない。実体の範型が可想的である以上、ひとまとまりの実体があるということが概念的に理解されても、どれがひとまとまりの実体なのか分からないからである。(4) そこで用いるのが、識別の機能である。「識別 (Discerning)」とは、いくつかの観念を区別する機能であり、それによって異なる対象や性質を知覚する (E2.11.1)。トマトの観念と机の観念の差異を識別することで両者を異なる観念として捉え、実体の範型と比較することでそれを一つの「赤いトマト」として捉え、(5) 判断し、「知覚」するのである。

2.2 観念の統一性

このように理解するならば、ロックの観念がただ多義的で統一性を欠いているわけではないことが分かるだろう。我々は心の機能によって想定された可想的な観念を用いることで、感官から受容された可感的な観念を知覚するのである。ならば、一見多義的で統一性のないように思われたロックの観念も、実は「知覚」の行われ方を考察する際に密接に結びついていることが理解されよう。可感的な観念も可想的な観念も単一の「知覚」の際に共に心によって用いられているものなのであり、だからこそロックはそれらを観念という一つの語で呼んだのである。

「知覚」の行われ方を考察する際、想定されるのは可想的な観念だけではない。実は、可感的な観念までも、単一の「知覚」という事態を説明するために導入されたものとして捉えられる。我々は実際に「知覚」を行う際、可感的な観念と可想的な観念とを区別していないからである。可感的な観念と可想的な観念とが区別されるのは、「知覚」を説明する時に限られる。そして、それは「知覚」の発生に関する物理的、或は心理学的な記述ではない。我々の「知覚」のあり方を、認識論的に分析する際に、いわば道具として導入される語なのである¹¹。ならば、可感的な観念までも、「知覚」を行うために想定されたものとして理解出来るだろう。ロックは自身の観念説——「観念の道 (The Way of Ideas)」——によって、「知覚」のあり方を記述したのである(記述という平明な方法 (Historical, plain Method) (E.1.1.2))。

以上、ロックの観念に見られる統一性を示した。しかし、こうした「知覚」に

ついでにロックの説明は、自身の原理に反するのではないか、という批判が想定される。次に、こうした批判に回答する。

2.3 知覚の際の自動性

ロックの観念が、単に多義的であるがために統一性を欠いたものではない、ということが確認されたが、知覚の際に行われている心の作用とはどんなものなのか。自動的に行われるならば、知覚される観念は意識されていないことになり、生得観念を認めないロックの基本原理に反することになるのではないか。こうした批判が考えられよう¹²。しかし、こうした批判はロックの意識概念を十分に考察しきれていない。人格の同一性について論じる際、それがただ同じ人間の同じ意識に基づくとしながら、以下のように述べているからである。

ある知的な存在者がある過去の行為の観念を、その行為を初めて行った時と同じ意識と共に、またある現在の行為に対して持っている意識と同じ意識と共に、反復出来る限り、その知的な存在者は同じ人格の自分なのである。(E2.27.10)

一ノ瀬の指摘するように、ここで「ロックが「意識」ということで意味しているのは、過去の行為の観念を反復「できる」ということであって、現に反復していなくてもよいのである。つまり、「意識」といっても、必ずしも、文字通り現に意識していることに結びつかなくともよい」(一ノ瀬 1997, 109)。このように、ロックは意識を顕在的な意味だけでなく、潜在的な意味でも用いていた。ならば、心の作用による観念の知覚が自動的に行われるからといって、彼が斥けた知識や観念の生得性に抵触するわけではない。自動的な心の作用は、潜在的な意識と共に行われるからである。

このように、本節ではロックの観念が多義的であるがために統一性を欠いているという批判が妥当でないことを確認した。確かに彼の観念には少なくとも可感的なものと同知的なものがあり、その限りにおいては多義的だと言えよう。しかし、それらは「知覚」のあり方の説明において連関と統一性を持ってい

る。そしてそれらは実は、「知覚」について考察し記述するために、ロックのいわば道具として想定されているのである。こうしたロックの観念説は、単なる歴史的な議論であるに留まらない。彼の議論は、従来の感覚与件論では捉えられないような「知覚」をも、その射程に入れていたからである。以上を踏まえ、次節では具体例を交えながら、ロックのテキスト解釈を越えた問題について見ていく。

3. ロックの観念説の射程

本節では、ロックの観念説の射程を示すべく、従来の感覚与件論——彼の観念を可感的なものに限るなら、こうした知覚論として理解される——では捉えきれない知覚について考察する。そこで、まずは感覚与件論の概要を素描する。

3.1 感覚与件論とその難点

感覚与件とは何か。『哲学入門』において、バートランド・ラッセルは次のように論じている。

「感覚与件 (sense-data)」という名を、感覚において直接知られる事物に与えよう。色や音、匂い、硬さ、手触りなどが、そうした事物である。そして「感覚 (sensation)」という名を、こうした事物について直接意識している経験に与えよう。(Russell [1912] 1998, 4)

ラッセルの説明は、極めて明快である。これによると、感覚与件論において、(1) 直接意識されているもの、すなわち知覚の対象が、感覚与件である。そして、(2) これらは感覚において、直接知られる。したがって、判断は感覚与件についての判断だということになる。本稿では、感覚与件論を、差し当たり以上に理解する。

では、ロックは感覚与件論者だったのか。ある意味ではそうである。彼にとって知覚の直接的な対象は観念であり、それらには可感的なものも含まれるか

らである。しかし詳しくは後述するが、彼は感覚与件論者たちの抱える三つの問題点に気づいていたという点において、従来の感覚与件論者たちとは異なる。その問題点の第一は、実体をいかにして「ひとまとまりの実体」として知覚するのか、という点である。第二に、ハンソンの指摘する理論負荷的 (theory-laden) な知覚を説明出来ない、という点である¹³。第三に、倒立眼鏡を通じての知覚を説明出来ない、という点である。以下では、それぞれについて検討し、ロックの立場からその都度応答したい。

3.1.1 ひとまとまりの実体の知覚

目の前に赤いトマトがあり、それが机の上に置かれているとしよう。我々はそれが「赤いトマト」だということを即座に知覚する。しかし、知覚の際に用いるのが感覚与件だけならばどうか。確かに我々は「机の上に置かれた赤いトマト」の視覚的な像を知覚することは出来るだろう。しかし、トマトと机が別個であること、すなわち机とトマトが一体となっている物体でないことをいかにして区別するのか。さらに言えば、その背景までも含め、目の前に広がっている景色が一枚の写真のような連続的なものでないことをいかにして知るのか。感覚与件論を採るなら、「トマト」を一つの実体として知覚している時と、「一体となっている机とトマト」を知覚している時と、精巧に出来た一枚の写真を知覚している時とを区別出来ない。これらの場合において、我々が得ている感覚与件は同じだからである。しかるに、こうした知覚を我々は区別する。

ロックの観念説はどうか。この点については既に2.1で論じたが、再度、簡単に振り返っておこう。我々が知覚を行う際、最初を受容するのは確かに感覚与件である。しかし、「把持」や「比較」などの心の作用によって範型となるような概念を抱きながら、バラバラであるはずの感覚与件を、一つの実体として取りまとめ、知覚するのである。ロックの側からは、このような回答が可能であろう。

3.1.2 理論負荷的な知覚

別の例を挙げてみよう。目の前に一枚のレントゲン写真があったとする。レントゲンについて一度も見たり聞いたりしたことがない子供には、単なる白黒の写真として知覚されよう。そして、専門家でない我々には、それがレントゲン写真として知覚されるだろう。しかし、医師には異なった仕方でも知覚される。それは肺の状態を表したもの——健康である、或は肺がんを患っているなど——として知覚される。この際に、我々の網膜に写っている像は同じものである(少なくとも、網膜像によって素人と医師を区別するのは不可能である)。ならば、感覚与件によっては区別出来ない。これらの知覚は感覚与件論によって説明出来ないばかりか、感覚与件論によって説明することは寧ろ、我々の「常識を超え出ている」(Hanson 1969, 78) ののではないか。

ロックの側からは次のような説明が可能である。確かに、我々が初めてレントゲン写真を見る時は、その視覚像しか知覚出来ない。しかし、経験を経ることで一般的な大人はレントゲン写真という概念を、医師は肺の医学的見地における意味を理解するようになる。結果、一枚の写真から得られる感覚与件を通じて、「レントゲン写真」や「健康な肺」という概念を抱き、そのようなものとして知覚する。このようにして知覚されるものは感覚与件や像ではない。「レントゲン写真」や「健康な肺」は概念である。確かに、「健康な肺」ということで、その具体的な像を抱くことは十分に可能であるが、「健康な」という言葉は「正常である」、「異常がない」といった感覚与件や像によっては理解出来ない事柄を意味しているのだから、やはり概念なのである。したがって、こうした知覚は、感覚与件と概念とを共に用いることで成立する。

それだけではない。ロックが知覚の際に行われているとする、心の作用の持つ二つの特徴、すなわち経験的で自動的に行われるという特徴は、実に上手くこうした事態を捉えている。医師がレントゲン写真を見る時、素人とは異なり、単なる写真としてではなく、肺の状態を表したものとして知覚するのは、彼らが医学的知識を経験によって身につけたからである。さらに、熟練の医師になればなるほど、肺の状態としてよりスムーズに自動的に知覚されるようになることは、ロックの説明をさらに確証するであろう。

3.1.3 倒立眼鏡を通じた知覚

以下の例について考えてみよう。倒立眼鏡を掛けると、網膜像が反転するため、最初は全ての視覚的な知覚が上下逆さまに行われる。ところが、一定期間を経ると、それと意識されることなく従来通りの知覚が行われるようになる。この際、網膜像、したがって視覚的な感覚与件は何も変わっていない。では、なぜ従来通りの知覚が行われるようになるのだろうか。

ロックからは次のような応答が出来よう。確かに、倒立眼鏡を掛けている間、我々の感覚与件は変化していない。しかし、倒立眼鏡を掛ける前と後では、視覚によって得られる感覚与件が変化しているのに対し、触覚などの他の感官を通して知覚される感覚与件は、変化していない。そして、他の感官から得られる感覚与件を通じて、我々は視覚的な知覚が異常であることを知る。そこで、我々は判断によって、知覚を修正するようになる。最初はこのことが顕在的な意識を伴って行われるのであるが、やがて覚知されることなく、自動的な判断によって知覚を修正するようになる。そしてこうして自動的に行われる知覚は、行われるまで一定期間を要するため、経験的に行われる。以上のように回答出来よう。

とはいえ、第一と第二の事例に関しては、ハンソンが指摘しているように、感覚与件論者からは次のような反論が予想される。我々の知覚は感覚与件によって行われているのであり、「一つのまとまりとして見る」ということや「肺の状態として見る」ということは、それと異なる「解釈」の問題なのである、と¹⁴。そこで、こうした反論について検討する。

3.2 感覚与件論者の反論

上記の感覚与件論者の反論は、二つの点で受け入れがたい。第一に、こうした主張は「感覚与件の把握だけが見ることと見做される」(Hanson 1969, 102)と述べているに過ぎないからである。確かに、感覚与件の受容という意味での「知覚」と概念的把握をも含んだものとしての「知覚」とは区別可能であるし、これらを分けることは時として有効である。後述するが、ロックも両者を区別してい

る。しかし、我々が「知覚」ということで「一つの実体としての「赤いトマト」を知覚していない」と捉えるならば、それは明らかに不自然であろう。

第二に、感覚与件論者の言う「解釈」と、「ロックのテキストを解釈する」と言う時の「解釈」とでは明らかに異なった意味を持つからである。ウィトゲンシュタインの言葉を借りるなら、「解釈するということは考えることであり、何かをするということであるが、見るということは状態」(Wittgenstein 2009, 223)なのである。さらに、これらを区別せずに「解釈」という語を用いるなら、「解釈」という語は何の意味も持たなくなる。というのも、我々は常に感覚与件論者の言う「解釈」を伴って知覚しているため、「解釈」と「知覚」とを区別することが出来なくなるからである。この点は、論点先取だと思われるかもしれない。第一の点を前提しているからである。しかし、第一の点が妥当である以上(私にはそう思われるし、そうでないならば反例を示さねばならない)、こうした意味での「解釈」は、何の可想的観念をも持たないような生まれたての子供に対してのみ用いられるような、限定的で特殊な用語に留まるだろう¹⁵。

以上のように、感覚与件論者の反論が我々の通常の「知覚」の用法と大きく異なること、したがって妥当でないことが示された。しかるにこうした応答は、ロックの観念説にそのまま返ってくることになる。知覚の際に「心の作用が働いている」と述べることは結局、知覚と解釈とを分けることと変わらないのではないか、という問題が浮上するからである。以下では、ロックの言説に再び立ち戻りながらこの点について考察する。

3.3 ロックの観念説と感覚与件論者への批判

果たしてロックの観念説は、従来の感覚与件論者と同様の難点に直面しているのか。そうではない。彼は二通りの意味で「知覚」という語を用いているからである。一つ目は我々が「ものを知覚する」と言う時の広義の「知覚」であり、二つ目はまさに感覚与件論者の言うところの狭義の「知覚」である。このように、ロックの知覚に二通りの意味があることを指摘したのが、グリーンリーである(Greenlee 1967, 104)。だが、彼の議論は二義性を示唆するに留まっている。そのため、根拠を欠いているとホールに批判された(Hall 1990, 18)。そこで、知

覚の持つ二つの意味を説明したい。

まずは広義の知覚について見てみよう。ロックは心の機能について論じた直後、複雑観念について論じるのだが、その際に「心は単純観念を受け取る (reception) 際に完全に受動的である」(E2.12.1) と述べる。ここで「受け取る」ということで「知覚する」ということを意味しているのは明白である。しかし、確かに「赤」の単純観念は可感的な観念であろうが、それを「赤」の観念であると知覚するためには、「識別」の機能を用いなければならない¹⁶。であるならば、ここで言われている「受け取り」とは、「識別」などの心の機能を経た後の、すなわち広義の知覚でなければならないだろう。さらに、ロックは心の機能の一つとしての「知覚」を論じる際に、以下のように述べている。

知覚は、心が我々の観念に対して行使する最初の機能であり、そのために我々が内省から得る初めての、最も単純な観念であって、なかには思考一般と呼ぶ人もいる。しかし、思考は、正しくは英語では、心にある観念に関する心の作用の内、心が能動的であるような種類の作用を意味表示し、心は何らかの事物をある程度まで有意的に注意して考察する。というのは、単なるなまの知覚 (bare naked Perception) では、心はその大部分において、ただ受動的なのであり、その知覚するものを知覚せずにはいられないのである。(E2.9.1)

ここで彼は思考 (Thinking) と知覚とを区別している¹⁷。まず注目されるべきは、ロックが知覚を「我々の観念に対して」行使すると述べていることである。つまり、知覚は可感的な観念に対して行われるのである。ならば、それは感覚与件に対して行使されるのだから、感覚与件論者の言う狭義の知覚とは異なることが見て取れるであろう。次に、彼は「思考」と「知覚」とを厳密に、したがって狭義に捉えて区別するために、「単なるなまの知覚」という語を導入している。それまでの広義の知覚と異なり、わざわざ異なる語を用いていることから、これこそが狭義の知覚であることが明らかになるだろう。要するに、ロックは感覚与件論者たちと異なり、基本的には知覚ということで広義の知覚を意味していたのだが、同時に感覚与件を受け取るという意味での狭義の知覚にも気づい

ていたのである。その上で、「知覚」という語を我々が日常的に用いる仕方であったのである。であるならば、従来の感覚与件論者の知覚論とは明白に区別されること、そして彼らへの反論が当てはまらないことが看取されよう。

以上、従来の感覚与件論との対比を通じて、ロックの観念説の射程を明らかにした。最後に、錯覚や幻覚についての説明を試み、本稿を終えることにしたい。

3.4 錯覚と幻覚

錯覚と幻覚について、ロックの立場からの説明を試みる前に、両者はどう異なるのか、簡単に確認したい。錯覚とは、コップの中のストローが曲がって見えるといった事態である。この際、現に目の前にあるストローを知覚しているという点で、存在する対象についての知覚である。一方で、幻覚とは幽霊のような、ありもしないものを見るという点で、存在しない対象についての知覚である。

まずは錯覚の場合について考えてみよう。コップの中のストローを見る時、我々はまず「曲がっているストロー」の感覚与件を受け取っている。次に、そうした観念を把持し、ストローの範型と比較する。その際、通常は比較の結果、両者は異なるものとして識別され、「曲がっているストロー」は「曲がっているように見えるが、実際は曲がっていないストロー」だと判断され、知覚される。錯覚が起こるのはこうした通常の知覚のプロセスを経ない時である。ストローを「実際に曲がっているストロー」として捉える幼い子供の場合について考えてみよう。この場合、感覚与件を受容し、把持するところまでの心の作用において、通常の知覚との差異は見られない。差異が見られるのは比較の段階においてである。この場合、子供は「実際は曲がっていないストロー」という概念を持っていないため、十分に比較を行うことが出来ない。その結果、両者を上手く識別することが出来ず、「ストローは実際に曲がっている」という判断により、錯覚を起こす。つまり、知覚における一連のプロセスが十分に行われなかった場合に、錯覚が起きるのである。

先ほどの事例では、比較が適切に行われていない事例を扱ったが、錯覚が起

きるのは必ずしも比較の不適切さによるのではない。たとえば、高速で通り過ぎるものに関して、我々はしばしば錯覚を起こす。これは、把持が十分に行われていないことによって引き起こされると理解されよう。このように、知覚の際に行われる心の作用が、十分に行われなかった時、錯覚が起こるのである。ロックの観念説からは、このような説明が可能である。

では、幻覚の場合はどうか。ロックは感覺的知識について説明する際、以下のように述べている。

このこと[感覺によって得られる観念が幻覚かどうか]について私が思うに、我々はこうしたことを疑わせないような証拠を提供されている。というのは、私は尋ねたいが、日中に太陽を見る時と夜中に太陽について思惟する時とで、それぞれが異なる知覚だと自身で明確に意識しない人がいるだろうか。[…]我々は自身の記憶によって我々の心で再生された観念と、我々の感官によって現実に我々の心に入ってくる観念とを、二つの判明な観念と同じように明確に、その差異を見出す。(E4.2.14)

要するに、幻覚によって得られる観念と実際の感覺知覚によって得られる観念とを、我々は二つの判明な観念を区別するように明確に区別出来る、と述べているのである。さて、我々は識別という心の作用によって二つの観念を互いに異なるものとして見分けるのであった。そしてロックによると、これと同じ明確さをもって我々は幻覚とそうでない観念とを見分けられる。ならば、幻覚もまた、心の作用によって見分けられるのものであると考えるべきではないか。

このように捉えるなら、幻覚が起こる場合もまた、心の作用が十分に行われていない時に起こるものとして理解出来よう。そして、幻覚とは存在しないものに関する知覚である。ならば、そもそも心の作用の最初の段階、すなわち感覺与件の受容の段階において、知覚が誤っていると捉えられる。つまり、幻覚も錯覚同様、心の作用が十分に行われていない時に起こるのである。

以上、最後に錯覚と幻覚についての説明を、ロックの立場から試みた。とはいえ、こうした議論はまだまだ不十分である。これらについての更なる考察を今後の課題とし、本稿を終えたい。

・まとめ

本稿では、ロックの観念の知覚の内、感覚知覚がいかにして行われているのかということ、『知性論』での議論に依拠しつつ、我々の日常的な知覚に即しながら説明することを試みた。

そこで、知覚の対象たる観念について考察するべく1節ではパークリらがロックの観念を像や感覚与件のような、可感的なものとして捉えていたことを、彼らの抽象観念を巡る議論を通じて、確認した。一方で、ロックが観念に可感的な用法だけでなく、意味や概念としか言い表せないような、可想的な用法をも認めていたことを、それぞれの仕方で用いられている場面を指摘することで示した。

以上を踏まえ、知覚の場面に焦点を当てた2節では、ロックの観念を多義的で統一性がないと批判する論者たちに対し、彼の知覚に関する議論を検討し、心の作用に着目しつつ再構成することで、観念が知覚のメカニズムを説明する際に密接に結びついていること、そしてその意味で統一性を持っていることを明らかにした。さらに、可想的な観念だけでなく、可感的な観念も、感覚知覚を説明するために想定されたものであることを示した。

3節では、彼の知覚論が、従来の感覚与件論では説明出来ないような理論負荷的な知覚や、倒立眼鏡における知覚の説明をもその射程に捉えていることを明らかにした。その上で、『知性論』における知覚の二義性に注目することで、ロックの観念説がある意味での感覚与件論ではあるものの、いくつかの点で従来のものと異なることを示し、感覚与件論者に寄せられる批判が彼に妥当しないことを確認した。最後に、彼の立場から錯覚と幻覚について、心の作用によって説明することを試みた。

註

¹ 本稿は、従来の研究において看過されがちであった「知覚 (Perception)」に注目することで『知性論』全体を読み解こうとするプロジェクトの一環である。ここでは「観念の知覚」について取り上げるが、ロックは知覚を三種に分け、他にも「記号の意味表示の知覚」、「我々の諸観念間の中に存する結合や背馳、一致や不一致の知覚」について論

- じている (E2.21.5)。これらについては今後、それぞれ論じる予定である。拙論 (Kasuga 2014) では、この主題についてより簡潔に論じた。
2. ホールは像と感覚と件の違いを、外的な対象の存在の有無によって特徴づけている (Hall 1990, 22-3)。差し当たり、このように理解したい。
 3. 「可感的 (sensible)」と「可想的 (intelligible)」の用法と名称は富田に従った (cf. Tomida 2001; 富田 1991)。ロウはそれぞれに対して「知覚対象 (percepts)」と「概念 (concepts)」という名称を用いている (Lowe 2005, 25; Lowe 2013, 19)。
 4. バークリの著作から引用する際、『注解』の場合は略記号 PC の後に項番号を、『人知原理論』(以下、『原理』)の場合は略記号 PHK の後に節数を(「序論 (Introduction)」の場合は節数の前に略記号 I を)、『視覚新論』の場合は略記号 NTV の後に節数を示すことにする。尚、本文中の引用は特に断りがない場合、拙訳によるものである。
 5. ただし、これはロックのテキストからそのまま引いたものではなく、『知性論』の該当箇所をバークリ自身が要約して引用したものである。
 6. バークリの一般観念とは、「同種の他の全ての個別的な観念を代表、或は表したりする」(PHK.I.12) ような観念であり、それ自体は可感的である。つまり、我々のイメージ出来る個別的な観念が、同種の観念を代表することで一般観念になるのである。バークリ同様に一般観念を捉えているのが、ヒューム (THN1.1.7.6) やリード (Reid [1785] 1983, 244) である。ヒュームの『人間本性論』からの引用は、略記号 THN を用いて順に巻数・部数・節数・段落数を示した。
 7. ロックは我々は個別的な知識から公準に関する知識を得るということを説明する際、同節内で抽象観念 (abstract Ideas) と一般観念 (general Ideas) とを同様の意味で用いている (E4.7.9)。そのため、ロックはバークリと違って、両者を特に区別しないで使っているとと言える。「一般」と「抽象」の差異がバークリの議論を理解する上で重要であることを三浦は指摘している (三浦 1988, 28)。
 8. マッキーの指摘するように、その抽象観念が単純観念か様相の観念か、といった観念の種類に応じてそれぞれ異なる扱いが必要となるが、ここでは差し当たり様相の観念である三角形の抽象観念に絞って議論を進める (Mackie 1976, 118)。
 9. ギブソンも、ロック自身の失敗により、彼の観念の内実が不明瞭で我々を混乱させると述べている (Gibson 1917, 46)。
 10. 心の作用が経験的であることは、彼の抽象観念に関する議論からも伺える (E4.7.9)。
 11. Cf. O'Connor 1967, 29.
 12. Cf. O'Connor 1967, 36; 富田 1991, 19.
 13. ロックの観念を可感的なものに限るなら、「…と考える」こと、及び理論負荷的な知覚が説明出来なくなることは、富田が指摘している (富田 1991)。
 14. Cf. Hanson 1969, 87, 102.
 15. もっとも、ライブニッツ的な生得説を採り、生まれたての子供にも可想的な観念があることを認めるならば、この点は拒否出来るかもしれない。しかし、そうだとすれば「解釈」という語はますます意味を持たなくなるし、感覚と件論者の体系自体も危うくなるだろう。
 16. したがって、単純観念を知覚する際に、心の機能が全く働いていないと述べるルイスの議論は、ロック解釈として誤っていると言わざるをえない (Lewis 1969, 129)。
 17. 太田はこの点を看過し、ロックは「perception と thinking との差異などには全くふれていない」(太田 1985, 244) と述べている。

・ ロックの著作

(1)『人間知性論』からの引用は、以下のテキストから、略記号 E を用いて順に巻数・章数・節数を示した。

『人間知性論』: Nidditch, P. H. ed. 1975. *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford University Press. (Orig. pub. 1690/1694/1695/1700/1706/1710.)

(2) 邦訳として『人間知性論』の大槻春彦訳(岩波文庫)を参考にしたが、適宜訳を改変した。

・ 参考文献

Aaron, R. I. 1971. *John Locke*, Oxford University Press. (Orig. pub. 1937/1955/1971.)

Bennett, J. 1971. *Locke, Berkeley, Hume*, Oxford University Press.

Berkeley, G. 1948. *Philosophical Commentaries*, Luce, A. A. & Jessop, T. E. eds. *The Works of George Berkeley*, vol. 1, Thomas Nelson & Sons.

———. 1948. *A New Theory of Vision*, Luce, A. A. & Jessop, T. E. eds. *The Works of George Berkeley*, vol. 1, Thomas Nelson & Sons. (Orig. pub. 1709.)

———. 1949. *A Treatise concerning The Principle of Human Knowledge*, Luce, A. A. & Jessop, T. E. eds. *The Works of George Berkeley*, vol. 2, Thomas Nelsons & Sons. (Orig. pub. 1710/1734.)

Gibson, J. 1917. *Locke's Theory of Knowledge and its Historical Relations*, Cambridge University Press.

Greenlee, D. 1967. "Locke's idea of "idea"," *Theoria*, vol. 33, no. 2, 98-106.

Hall, R. 1990. "Idea" in Locke's Works," *The Locke Newsletter*, vol. 21, 9-26.

Hanson, N. R. 1969. *Perception and Discovery: An Introduction to Scientific Inquiry*, Humphreys, W. C. ed. Freeman Cooper & Company.

Hume, D. 2000. *A Treatise of Human Nature*, Norton, D. F. & Norton, M. J. eds. Oxford University Press. (Orig. pub. 1739/1740.)

Kasuga, R. 2014. "Perception of Ideas in Locke's *An Essay concerning Human Understanding*," *The Proceedings of the 9th BESETO Conference of*

- Philosophy*, 234-43.
- Lee, H. D. D. 2011. *Anti-Scepticism: Or, Notes upon each Chapter of Mr. Locke's Essay concerning Human Understanding. With an Explication of all the Particulars of which he Treats, and in the same Order, In Four Books*, Nabu Press. (Orig. pub. 1702.)
- Lewis, D. 1969. "The Existence of Substances and Locke's Way of Ideas," *Theoria*, vol. 35, no. 2, 124-46.
- Lowe, E. J. 2005. *Locke*, Routledge.
- . 2013. *The Routledge Guidebook to Locke's Essay Concerning Human Understanding*, Routledge. (Orig. pub. 2005/2013.)
- Mackie, J. L. 1976. *Problems from Locke*, Oxford University Press.
- O'Connor, D. J. 1967. *John Locke*, Dover Publications.
- Reid, T. 1983. *Essays on the Intellectual Powers of Man*, Beanblossom, R. E. & Lehrer, K. eds. *Thomas Reid's Inquiry and Essays*, Hackett Publishing Company. (Orig. pub. 1785.)
- Russell, B. 1998. *The Problems of Philosophy*, Oxford University Press. (Orig. pub. 1912.)
- Ryle, G. 1971. "John Locke on the Human Understanding," in *Critical Essays*, Routledge. 132-53. (Orig. pub. 1932.)
- Swabey, W. C. 1991. "Locke's Theory of Ideas," in *John Locke: Critical Assessments*, vol. 4, Aschcraft, R. ed. Routledge. (Orig. pub. 1933.)
- Tomida, Y. 2001. *Inquiries into Locke's Theory of Ideas*, Georg Olms Verlag.
- Wittgenstein, L. 2009. *Philosophical Investigations*, Anscombe, G. E. M. & Hacker, P. M. S. & Schulte, J. trans. & ed. Blackwell. (1953/1958/2001/2009.)
- Woolhouse, R. S. 1994. *Locke's Philosophy of Science and Knowledge*, Gregg Revivals. (Orig. pub. 1971.)
- Yolton, J. W. 1956. *John Locke and The Way of Ideas*, Oxford University Press.
- 一ノ瀬正樹. 1997. 『人格知識論の生成——ジョン・ロックの瞬間』, 東京大学出版会.
- . 2000. 「「観念」再考——経験論の源泉へ」, 哲学史研究会編『西洋哲学史

の再構築に向けて』, 昭和堂. 278-338.

太田可夫. 1985. 『ロック道徳哲学の形成——力について』, 田中正司編, 新評論.

小池英光. 1980. 「ロックの認識論と先行思想——デカルトを中心として」,

田中正司・平野耿編『ジョン・ロック研究』, 御茶の水書房. 55-80.

富田恭彦. 1991. 『ロック哲学の隠された論理』, 勁草書房.

三浦雅弘. 1988. 「バークリの「抽象」の理論」, 『哲学』, 第 86 号, 27-58.